

## コロナ禍の中でも国際署名の取り組み続く 2020年の活動

### 核兵器のない世界へジャンプアップ！ ジョー・オダネル写真展

核兵器をめぐって様々な逆流が強まる中、被爆 75 年の今年を核兵器廃絶に向けた転換の年にしようと、新年早々意欲的な取り組みが行われました。

ヒバクシャ国際署名を進める北海道民の会は、1月4日から11日にかけて、札幌市のエルプラザで、「核兵器のない世界へジャンプアップ！」と題して、被団協作成の「原爆と人間」パネル展、「焼き場の少年」で有名なジョー・オダネルの写真展、あわせて被爆者が描いた「原爆の絵」展を開催しました。8日間で約550名が来場、162筆の署名が寄せられました。3月末段階で累計687,198筆が集約されました。



その後まもなく新型コロナ・ウィルスの感染が拡大し、その脅威が報じられる中、各団体や個人の活動はさまざまな制約を余儀なくされていきました。4月末から5月にかけて行われる予定だったNPT再検討会議も延期になりました。

### 被爆75年夏・北海道 核兵器のない世界に向けて意気高くー

7月5日、ヒバクシャ国際署名を進める北海道民の会主催の「PEACE WAVE 被爆75年 核兵器のない世界を」街頭宣伝行動が、札幌市の大通西3丁目で行われました。コロナ禍の中しばらくぶりの街頭行動でした。参加者は約20名、署名25筆、新しいチラシ約100枚でした。

「核兵器禁止条約発効まであと12か国、51番目でいいから日本政府にも批准させましょう」「ふたたび青年をあの暗い時代に送り込んではいけません」「被爆75年、核兵器をめぐって前進と後退がありますが、最後は市民の力が歴史を作ります。核兵器はなくすことができます」とそれぞれが力強い訴えを行いました。



5歳のとき広島の皆実で被爆した金子廣子さんは「私たち家族は8人全員が被爆、学校の朝礼のさ中背中から被爆した姉は10日余りたって亡くなり、数年後には父も亡くなり、母と私は結婚した姉を頼って北海道へやってきました。生活の苦勞、差別、原爆症、様々なことを抱えてここまでまし

た。再び被爆者をつくってはなりません。悲惨な戦争を二度と繰り返してはなりません」と訴えました。

ヒバクシャ国際署名は現在全国で 1184 万余筆、うち北海道では 68 万余筆が集まっており、さらに署名を広げ秋の国連総会に届けようと申し合わせました。

## ヒバクシャ国際署名、1261 万 2798 筆を国連へ

核兵器のない世界をめざすヒバクシャ国際署名が 9 月 18 日時点で 1261 万 2798 筆集まり、10 月 6 日国連軍縮部にメールで目録が送られました。このうち北海道分は 70 万 3858 筆です。核兵器禁止条約の批准国は現在 46 か国、グテレス国連事務総長は今月中に 50 か国までいくのではないかと、言っています。

先だって、9 月 12 日（土）、ヒバクシャ国際署名を進める北海道民の会主催の街頭署名が、札幌市大通り西 3 丁目で行われました。国際署名の最終集約が 18 日に迫る中、共同の街頭署名は今回が最後となりました。30 余名の参加でした。

会場には原爆パネル、「核兵器のない世界をめざし、あなたの署名を国連へ」の横断幕、被爆者協会や二世プラスの会ののぼりなどが飾られました。前日の北海道新聞で報じられたこともあって、高校生から年配の方まで、「署名をしにきました」という人がかなりの数にのぼりました。中には署名活動を手伝ってくれる人、署名をした後に戻ってきて



5,000 円をカンパしてくれる人、「日本政府は核兵器禁止条約を批准せよ！」のパネルと原爆ドームの水彩画を持って加わってくれた仲間もいるなど、いつにも増して意気込みと活気を感じる署名行動でした。

リレートークの弁士も、呼びかけ人代表の眞田保さん（北海道被爆者協会会長）、同上田文雄さん（弁護士、前札幌市長）、石岡伸子さん（原水協代表理事、新婦人会会長）、吉田千恵さん（コープさっぽろ組合員活動委員会委員長）、よびかけ人高崎暢さん（弁護士）と続き、最後を川去裕子さん（被爆二世の会会長）が締めくくりました眞田さんは「塀ひとつで私は助かり従弟は亡くなった。被爆者は高齢化した核兵器の廃絶は私たちの悲願です。ぜひ署名にご協力下さい」とよびかけ、弁士はそれぞれ核兵器禁止条約の一日も早い発効をと訴えました。

11 時から 11 時 45 分の間に 143 筆の署名が集まりました。署名はいったん 9 月 18 日に集約されましたが、核兵器禁止条約の批准成立、発効を前に年内続けられることになりました。

## 核兵器禁止条約来年1月22日に発効

10月24日、南米のホンジュラスが核兵器禁止条約を批准し国連に批准書を寄託しました。これで批准国は50か国、条約は来年1月22日に国際法として発効することが確定しました。私たちは被爆75年に実現したこの出来事を、深い感動をもって受け止めました。

75年前の8月、原子爆弾が人類の頭上でさく裂し、理由もわからぬまま命を奪われた数十万の原爆死没者と、今日まで被爆者運動に死力を尽くしてきた被爆者、ともに闘ってきた団体・市民すべての人々の手に、新しい国際規範が手渡されました。

2016年に呼びかけられた国際署名は、今まで1261万余筆が国連に届けられました。このうち北海道は70万3858筆です。核兵器は非人道兵器で不要なものであるとの認識が世界に広がり、核兵器禁止条約を推進する大きな力になってきました。核兵器の終わりの始まりです。世界史は新しい一ページを開いたと言ってよいでしょう。核兵器は、使用はもちろん開発も製造も保有も、そして威嚇も禁止されます。条約は核兵器に「悪の烙印」を押したのです。国際法として発効すれば、核の保有国も条約に入らない国も、事実上この条約の制約を受けることになるでしょう。

ヒバクシャ国際署名を進める北海道民の会は、核禁条約批准50か国達成を祝って、10月31日、札幌駅南口広場で街頭宣伝行動を行いました約30名の参加でした。被爆者が5名と二世が「核兵器のない世界を私たちの声と行動で」と書いた新しい横断幕をもって正面に並びました。被爆者を代表して道副会長・札幌市被爆者の会会長の廣田凱則さんが「核兵器のない世界は私たちの悲願だ。皆さんの協力があってここまで達成できた。まだまだ署名を集めて核兵器を廃絶したい」と訴えました。

続いて呼びかけ人の高崎暢弁護士が国際法としての条約の意義を説き、北海道労働組合総連合議長の三上友衛さん、新日本婦人の会北海道本部副会長の秋月博美さんが訴えました。新しいチラシ「おめでとう！核兵器禁止条約 核兵器の終わりが始まる」

約300枚が配られました。また41筆の署名と1800円の募金が寄せられました。

